
ヤンデレの幼馴染に死んでも愛され続けて番外編集

つんどら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヤンデレの幼馴染に死んでも愛され続けて番外編集

【Nコード】

N5253Y

【作者名】

つんどら

【あらすじ】

短編の番外小話を纏めました。本編ルート、IFなど色々。たぶんラブコメディ。ダークだったりシリアスだったり大体頭のネジが飛んでいます。残酷描写、性描写に注意。11/27、拍手小話追加。ひとまず放出し終えました。

ふたりの15年（前書き）

暴力描写などに注意。殴る蹴るは無いですが。

できればこちらを先にお読みください。

<http://ncode.syosetu.com/n3147>

y / - 本編

<http://ncode.syosetu.com/n3599>

y / - 後日談

ふたりの15年

● 0 歳

「ほーら、光ちゃん。お隣の美奈ちゃんよー、幼馴染よ」
「あら、しがみ付いた。恋に落ちたのかしら」
「あら、あらあら？ 離さないわねえ。本当に恋かしら」
「将来結婚させたら面白いんじゃない？」

「俺らの嫁が勝手に子供の将来を決めてるんだけど」
「うちの美奈はやらん」

● 1 歳

「みなー」
「あう？」

「最初の言葉が“美奈”って筋金入りよね」
「地味にシヨックだわ」

● 2歳

「美奈、愛してる」

「あいしてゆ？」

「発音が淀みないわね」

「あの子アニメより昼ドラとか映画よく見るんだもの」

「ああ、美奈ちゃんが輝いて見えるわ」

● 3歳

「ほら、言ってみて。愛してる」

「あーしてる」

「あ・い・し・て・る」

「あいしてりゅ」

「美奈ちゃんほんと天使みたい」

「違うわ、あなたの子が悪魔みたいなのよ」

● 4歳

「美奈、大人になったら結婚しよう」

「結婚ってなに？」

「一緒になるんだよ」

「……？」

「どうしましょう。ありがちな光景なのに」
「何故か穿った目で見ちゃうわね」
「ええ……」

● 5 歳

「あのねー、今日、ケンくんにお菓子もらった」
「うん。捨ててね」
「？ なんで？」
「汚いから」

「ちよっ、怖っ！ 息子が怖いわ！」
「どうしてあんなったのかしらね」

● 6 歳

「別のクラスだとフローシにくいね。休み時間は行くから」
「うん？」

「6歳にして横文字使い出したわよ……どうなのかしら、あれ」
「頭いいのね。最近は何見せてるのよ」
「ずっとBSで自然とか科学の番組見たり、ニュース見たり、あとプロジェクトXかしら」
「……すごい子供ね」

● 7 歳

「光輝、優勝おめでとう。すごいねー」

「そんなのどうでもいいよ。それより美奈、銅賞おめでとう」
「うん……?」

「自分の優勝より美奈の銅賞の方が価値が上なのね……」
「流石だわ」

● 8 歳

「……美奈、美奈、美奈」

「ひいっ」

「喧嘩……では、ないわね」

「まあいいんじゃないかしら。好きにさせておきましょう」
「……まあ、そうよね。あーあーうちの子怖い」

● 9 歳

「ねえ……どうして、他の男の子と、喋ったりするのかな」

「だっ、だって、無視とか駄目だし……」
「そんなことないよ」

「無くないっていうか、光輝も女子を無視するの、やめてあげてよ」

「最近、美奈ちゃんを尊敬するわ」

「よくあれで拒めるものよね……」

「そのうち既成事実握りそうね。今から謝っておくわ、ごめん」

「いいえ、いいのよ」

●10歳

「ただいま」

何とも言えない顔で帰ってきた美奈を、母親は首をかしげて出迎えた。

「あら、お帰りなさい」

小学五年生になる彼女は、隣の家の方輝に溺愛されながらも健気に頑張る、そこそこ真面目でしたたかない娘だ。

美奈は生返事を返して2階の自室に駆け上がったいく。

彼女が右手を庇っているのに気づくと、あら、と呟く。

「方輝くんが見張ってるから、怪我する筈は無いんだけど」

まさかその方輝にやられたとは露知らず、彼女は手当て手当てと呟きながら救急箱を探しに行った。

——美奈の右手首には、握り締められたような痣があった。誰にされたのか聞いたが、頑なに口を噤むばかり。

「……お父さんには言わないでね」

「わかったわ」

何か事情があるのだろう。過保護な父に言えば制裁しに行きかねないので、母親は素直に頷いた。

翌日、彼女は隣家の光輝に偶然会った。

「こんにちは、おばさん」

「あら、光輝くん、こんにちは。……そういえばうちの美奈、右手に怪我してたみたいんだけど、何か知らない？」

「右手に？……ああ、少しクラスの男子と、恋愛沙汰で揉めたよ。うで。大丈夫です、解決しました。守れなくてすいません」

「あら、いいのよ。あの子もそんな年頃なのねえ」

完璧な笑顔を浮かべる光輝から、真意を読み取ることなど出来なかった。

真相はと言うと、確かに嘘は吐いていないのだが、やったのは光輝だ。

美奈が告白され、その後のことだ。

左肩にも似たような痣が出来ていることだろう。更に、耳にもほんの小さな傷が出来ている筈だ。

——ねえ、美奈、どうして呼び出しに応えたりしたの？

——言ったよね……他の男と喋らないでって。

——それに、他の男の愛の言葉なんか、聞かないでよ。

——可愛い耳を、噛み千切られなくなかったらね。

親に言えよう筈も無い。

10歳にしてしっかり目覚めている光輝に悩まされつつも、遅し

く育つ美奈であつた。

● 11歳

「よかつた。同じ委員会だね」

「クラスの人脅してたじゃ……いや、ごめん、ごめん何も言わないから」

● 12歳

「ねえ、美奈。これどう思う?」

「ひいひい凄く手錠ですどこから手に入れたああああ!!」

● 13歳

「修学旅行、京都だつてね」

「う、うん……」

「班、一緒だね」

「うひい」

「迷子にならないでね。暴れるかも」

「脅すな!」

● 14歳

「進学先、何処にした？」

「あ……え、えーと、●●高校……」

「同じだね」

「や、やっぱり××にする」

「うん、同じだね」

「着いてくる気満々！？ 大人しく。。受けてよ！」

「何で？ 美奈のいない高校生活なんて、2秒で中退だよ」

「親を悲しませるなあああ！！」

●15歳

「……新入生代表、おつかれー」

「うん。ステージから見てたよ、美奈」

「う、うん……すごいガン見だね……」

「美奈以外なんて見る価値もないから」

「ええー……ねえ、光輝」

戸惑うような目。そんな顔も愛らしいと思いながら、光輝は躊躇のひとつもせずとその頬に手を伸ばした。

「……他に、似合う女の子、いると思う……こ、高校生になったし……その、幼馴染だからって、そんな、」

そして躊躇いがちな言葉に、一瞬光輝の思考は止まった。

いま、なにをいった？

「勘違いしてるだけじゃ、ないかな……ほら、刷り込みって——ッ！」

美奈の白い首を、光輝は右手でぎゅうと握った。それ以上喋るなとばかりに。苦しさに美奈は涙を浮かべ、血が上ったのか赤い顔でぱくぱくと口を動かす。

ああ、かわいい。

光輝は唇を歪め、甘い声音で、聞き分けの無い子供に言い聞かせるように言う。

「こんなに、愛してるのに。生まれてずっと、ずっと、愛してるのに……美奈は、わかってくれないのかな。俺は、美奈だけだよ」
「っ……は……っう、……くるっ……し、」

ぱ、と手を離す。力が抜けたようで、崩れ落ちる体を光輝が支えて、ソファにそっと寝かす。

苦しげに咳き込み、上下する胸をじいっと見つめる光輝の目は、熱い。

「美奈」

美奈ははっと顔を上げて、光輝が持っているものを見て顔を青くした。

「ひっ、ちょ、そ、それはっ」

「刻んで、あげるよ。信じられないなら、体に。ねえ、美奈」

君のせいだよ、と呟いて。

翌日美奈は、右腕の内側に文字通り刻まれたハートマークを押さ

え、じくじくと痛むそれに涙目で包帯を巻きなおしたのであった。

ふたりの15年（後書き）

↓生存ルート

↓死亡ルート

今日はボツキー&ブリッツの日(前書き)

短いです。

今日はポッキー&ブリッツの日

「あ、光輝。ポッキー食べる？」

「……何で？ 貰うけど」

「何で当然のように口を開けてその場待機なの！？ いや、11月11日だからね」

美奈は溜息を吐き、手に持っていたポッキーを光輝の口に差し入れ——そしてガツと思い切り手を掴まれて肩をびくつかせた。

「ひいつ！」

光輝は手首をギリギリと握り締めたまま、震える指先に摘まれたポッキーを食べる。握られすぎて血が止まって手が青白いが、全く気にしていない。

「ちょ、血、血が止まる——うぎゃあ！」

そのまま指まで持っていかれるかと思った、と美奈は後に語る。光輝は食べ終えたポッキーなど無かったかのように美奈の指を口に含んでいた。生温かい舌が這い回り、人差し指を根元まで銜え、あまつさえその指を甘く噛む。

何がしたいのだろうか。いや、目的など無いのだろう。むしろ舐

めて噛む事、そのものが目的なのだと分かっている、美奈は青ざめた顔を全力で左右に振っていた。

もはや本能の動きである。

「私の指はポッキーじゃないいいいいい！」

「ポキッと逝ってみる？ 一本ずつね」

「ひぎゃあああああ！！！」

あのこはいない（前書き）

本編前の正規ルートになります。

あのこはいない

● 16歳

「……」

血の海に沈む、物言わぬ死体を抱き締める光輝の姿を、それぞれの親たちはもう、見ていられなかった。

あの光輝が、泣いている。

美奈が息絶えるまでは何時も通りだった彼は、美奈の瞼が恐怖に引き攣ったまま閉じられるのを見て、その息が止まるのを感じて、その心臓が動きを止めた瞬間に涙を零した。

彼の父は、母は、そして美奈の父母は、知っていた。

確かに彼の愛情は執着とも言い換えられるものだったが、それでも、美奈の意思を尊重はしていた。

4人は光輝が美奈にしている事は知らないが、それでもその愛情の真っ直ぐさに打たれて、好きにさせてやろうと思っていた。

光輝の母は光輝が幼い頃に、既成事実でも作ってしまったらと先に謝ったが、体を繋げるところか唇にだけは口付けのひとつもなかった事を知っている。

不器用なのだ。

迷いなく突き進んでいるようで、けれど、傷つける以外には愛を伝える術を知らなかったのかもしれない。

それを知る前に美奈が居なくなっことは、けして彼にいい影響を与えはしないだろう。

光輝は、亡骸の唇にそつと口付けた。血の味がする。

ぼたぼたと涙が美奈の頬を滑り落ちていく。

その光景は陰惨で、退廃的で、そして何より、哀しかった。

愛の注ぎどころを失って、光輝はまるで人形のようになった。

まず最初に表情が消えた。美奈の体が火葬場で焼かれるのを見て、すうつとその表情がなくなっていくのを、沈痛な面持ちで彼の親は見ただ。

言葉の抑揚がなくなっった。美しい声だというのに、殆ど揺れない平坦な声になっった。

そして無気力になっった。学校に通い、ただ授業を受けるだけだっった。自宅では延々と美奈の写真の入っったアルバムを眺めていた。そ

れでもテストは決まって学年で1番だった。

もう、猫を被ることすらやめていた。

剣道部では厳しいながら気遣いの出来る人間と通っていたが、既に気遣いは無くなった。元より美奈以外に興味がゼロだったのだが、美奈があまりに周りを気にしろと言うので従っていただけなのである。

光輝の世界は美奈だけだった。

美奈が居なくなれば、世界など無いも同然なのである。

やがて進級し、最高学年になり、気づいたら生徒会長に祭り上げられていたが、全く心は動かない。事務的に仕事を進め、ただ最短距離だけを選び取る彼は、気づけば氷の男だと言われていた。

ただ、美奈の写真を眺めているときだけは、ほんの僅かに表情が和らいだ。

——そんなある日のことだ。

気づいたら、彼は上下左右見渡す限りの暗闇に包まれていた。

常人ならば取り乱す光景。暗闇の中に自分の体だけが見えているのだ。しかし光輝はぴくりとも表情を動かさず、ただ無感動だった。

(……ああ、もしかして、死んだのか？ 美奈と同じ場所に、行ければいいけど……)

そう考えた時には少しだけ口元が歪んだが、どうも動きはなく、このままずっとこのうなかと思うと再び無表情に戻った。

（美奈、美奈、美奈、あいたい）

願うのはそれだけだ。この所、ずっとそう思う。あの頃得られていた心の揺れは心地よかった。美奈の一挙一動に揺れていた心がひどく懐かしい。

美奈の息の根だつて、自分の手で止めたかったのに。
美奈を殺した女に、嫉妬すら覚えた。

（美奈……）

そつと目を閉じる。

——そのときだった。

「いやあ、流石だ」

全方向から聞こえてくるような奇妙な声に、ふと顔を上げる。
しかし回りには何も無い。

「あ、すまんすまん、今出るから——」

ずる、と。

空中に切れ目が入ったように、片足が突き出た。

サンダルのようなものを履いた、ややこつこつとした男の足だが、色は白い。

光輝はなんの感動もなく、ただ眺めていた。

「よいしょつと」

出てきたのはくるとカールした茶髪の、やや童顔な青年だ。
ギリシャ神話にでも出てきそうな服装で、容姿はとても美しい。
……といっても光輝は一ミクロンたりとも心を動かされはしないの
だが、大抵の女性なら見た瞬間抱きつきたくなるような魅力が発せ
られている。

「ちーっす、どうも、愛の神様だ」

「……」

「え、もうちょい反応しない？」

光輝はどうしてもよさそうに再び目を閉じる。
が、次の言葉に目をカッと開いた。

「折角愛し的美奈ちゃんに会えるチャンスなのに！」

次の瞬間、愛の神は地面に思い切り叩きつけられていた。

「俺以外が……美奈の名前を、呼ぶな」

焼ききれそうなまでの憎しみをぶつける。獣のような殺気に、愛
の神はにやりと笑った。

「そうそうそう、その目だその目。いいねえ、最近じゃ珍しいよ、
お前みたいなのやつは」

「うるさい」

「俺が見たいのはそういう愛なんだよ。愛ってのは生易しいんじゃ
駄目だよな、あんなお遊びみたいな愛じゃつまんねーよ。お前みた
いな奴が沢山いればいいのになあ」

「うるさい！」

ガンツ、と靴底を顔に叩き付ける。しかし愛の神は愉快そうに笑うだけだ。

「会いたいのか？ 全てを捨てても、会いたいのか」

「当たり前だ」

「おう、それでこそ！」

意味が分からない。

足をどけると、愛の神は汚れ1つつかない顔を払って立ち上がった。

「おめでとう、幸運の神に好かれてるぜ、あんた。運良くお前の愛する人が居る世界から、召喚される事になった。それで、だ」

「……」

「——向こうに彼女は居る。だが、姿は別人だ。……愛の神が約束しよう、それでも彼女を見つけ出せたなら、永遠に、生まれ変わっても共にあることを」

視界が白く染まる。

「見つけろよ。それで、一生離すな」

言われなくても、と光輝は呟いた。

あのこはいない（後書き）

（16歳↓IF集）

↓本編

もしかしたらあったかもしれない
(IF) (前書き)

美奈死亡後、あったかもしれない話。

もしかしたらあったかもしれない（IF）

その1

犯行現場は、ごく普通の家の庭だった。

平穏だった光景は血に染まって陰惨極まりない。しかし加害者の少女まで包丁を刺されて死亡し、その場で亡くなっており――被害者の方の遺体は、見つかっていない。

包丁に、指紋は無かった。

ざあ、と波の音がする。

光輝は愛しい彼女の亡骸を抱き締めてキスをして、ゆっくりと船に乗り込んだ。

「美奈……」

もう何も憚る事はない。まるでウェンディングドレスのような白いワンピースを着せられた少女は、傷だらけだが血は付いておらず、綺麗な状態だった。

死後硬直で固まった体を愛おしげに抱き締めて、ボートのエンジンを掛ける。

冷たい額を撫でながら沖に出て、エンジンを切り、日が落ちるのをじっと眺める。

その手付きはどこまでも優しく、まるで少女が死んでいることな

ど気にしていないようで。

「愛してる。ずっと、一緒だから」

——その後、彼の姿を見たものはいない。

(その1 Nice boat・END。ヤンデレと言えばやはりこれ)

その2

(前略) 遺体の行方はわかっていない。

——光輝が部屋から出てこなくなつて、3日経つた。

彼の両親も美奈の死に心を痛めていたし、美奈のことを誰より愛していた光輝がショックを受けて当然だとも思ったが、ドアの前に置いておいた食事にも手を付けていないので流石に心配になった。

このままでは後を追うような事態になつてしまう。

しかしノックすればノックが返されるので、まだ生きてはいるようだった。

「……光輝、開けなさい。悲しいのは分かるけど、そろそろご飯を食べないとあなたまで死んでしまうわ」

更に、美奈の遺体が見つからない事も、その悲しみを助長しているように思えた。

優秀だが美奈以外に興味の薄かった彼には堪えている事だろう。母親は今日も駄目か、と沈痛な眼差しでトレーを置こうとした。

その時、

ドアが開く。

「……光輝？」

「母さん」

ぽつり、と呟くような声だった。

「俺は——大丈夫だから」

僅かに、生温かい空気がドアの隙間から流れ出た。

母親はぐくりと唾を飲み込む。その言葉はただ穏やかなのに、何故なのか、背筋がざわりと粟立った。

「そ、そう。……ご飯は置いておくわ。食べてね」

分かった、と声が聞こえてドアが閉じた。

数日後、

部屋の中から発見されたのは、満足げな顔で息絶えた光輝の遺体だった。

——そして同時に、美奈の遺体も発見された。

僅かに残された骨などの部分を除き、

光輝の、胃や腸の中から——

（その2、猟奇END。これもどこかで見たことあるような）

その3

警察が現場に辿り付くと――そこは、悲惨の一言では片付けられない、稀に見る凄惨な空間が広がっていた。

血の海のようになったそこで、被害者らしき亡骸を抱き締めて背中を震わせている青年。

転がったアイスピックと包丁。

やがて、明らかに手遅れな救急車が到着する。青年は共に行くのかと思われたが、少女の血に濡れたままあっさりとそれを見送った。

そして、

おもむろに包丁を取ってある一点を睨む。

「ちょっと、君――」

不穏な空気に警官が彼の前に出た。

すると背後からガサツと音を立て、小柄な少女が飛び出す。

逃げ出そうとした彼女は、他の警官に取り押さえられた。
しかし光輝は――

「どいてください」

無感動な目で、ただただ冷やかに警官を睨む。包丁を持った手

をだらりと下げて彼を押しつけようとするが、警官は冷や汗を流しながらもそれを阻んだ。

「な、何をする気だ。君まで手を汚す気か」

「……どいてください、でないと」

瞬間、警官の視界がぐるりと回る。

地面に叩きつけられた警官の真上を飛び越え、青年は包丁を持って、逃げようとした少女の方に行こうとして再び誰かに阻まれる。

それは死んだ少女の父親だった。どうやら付いて行かなかったらしい。

「光輝くん、やめなさい」

光輝は黙って頭を横に振る。

「どいてください。……でないとそいつを、殺せない」

その目はただただ無だけを宿していた。

（その3。お兄ちゃんどいてそいつ殺せない！　みたいな……）

その4

葬式の会場で、不意に聞こえた声に光輝は目を細めた。

「——美奈ちゃん、かわいそうに」

それは何のこともない、彼女の親戚の男の声である。

それが引き金だった。

「きゃあああああ——っ!!」

絹を裂いたような悲鳴が響き渡る。

何事かと駆けつけた美奈の両親は、信じられない光景を見た。

「……こっ、光輝くん!？」

それは現代において、あまりに非現実的な光景に思えた。

手には、日本刀。そういえば座敷に飾ってあったなど、他人事のように彼女は思い出す。

亡くなった美奈の祖父の物だったそれには、確かに血が付いていた。

「俺、以外が」

あまりの光景に近寄れずにいる美奈の母親を他所に、光輝は良く通る声で——けれど少し泣きそうに叫んだ。

「美奈の、名前を、呼ぶなっ」

彼の足元には、絶命した親戚の男が、恐怖に歪んだ顔のまま転がっていた。

(その4、血の葬式END)

もしかしたらあったかもしれない (IF) (後書き)

↓IFその6

カサブランカ (IF) (前書き)

IFその5。

本編の逆トリップバージョンとも。

カサブランカ（IF）

——風が舞う。ざあ、と黄金色の海原を揺らして。

「……美奈。5年、経ったよ」

丘の上に、白い家が建っている。瀟洒な佇まいを見せるその家の前に、椅子を置いて写真を眺めている男が居た。

年の頃は、20代前半程だろうか。

黒髪を後ろで緩く結って、ラフな服装にも関わらず洗練された雰囲気、美しい男である。

「会いたい」

彼の目の前に、ぽつんと白い墓標がある。

それは彼が愛して、愛して愛して、今だ愛し続けている幼馴染の墓だ。

先祖代々の墓に美奈を入れず、新しく墓を作って近くで暮らしたと言った時、彼の家族も美奈の家族も切なげに目を伏せるだけだった。

どうにかこうにか説得して、在宅で出来る仕事をしながら彼はゆったりと暮らしている。

それが17歳の頃の事だ。

彼の胸元に、どこか場違いなダイヤモンドの付いたプレート型のペンダントが光っている。

裏側に美奈の名前が掘られており、そのダイヤモンドも美奈の遺骨から作られたものだ。

彼の世界には美奈しか居ない。
それは今だって変わらない。

ちっぽけなペンダントと、白く丸い墓だけが、今の彼の世界だった。

「……？」

ざあ、と風が光輝の髪を揺らす。暫く切っていない髪は随分と伸びて、肩甲骨のあたりまであった。

そして、

「つきやあああ！」

不意に魔法陣のようなものが黄金の草原に現れたかと思うと、長い黒髪の女が1メートル程の高さからぼとんと落下して思い切り尻餅をついていた。

光輝は暫くそれをじっと眺めて、顔を上げた彼女を見て、はっとした。

「痛たたたた……せ、成功……っひ！？」

涙目であたりを見回していた彼女は、光輝の顔を見てびくりと肩を震わせた。

（——ああ、）

光輝はじわりと滲むものを無視して、何か熱いものが込み上げるのを感じながら、何もかも忘れて彼女に駆け寄って抱き締めた。

抱き締める力が強すぎて彼女の意識は危うく落ちそうになったが、気にすることもない。

姿が変わっていたって、分かった。

「ちょ——まっ、ギブっ、ギブギブギブ！」

銀色の瞳を潤ませて、美奈が必死に光輝の背中を叩く。しかしその腕は暫く離されることはなく、美奈は「成功と思ったら早速これかあああ！」と叫びつつ意識を飛ばした。

ようやく元の世界に戻った私は、成長した光輝に抱き締められてさっそく肩が外れた。

……待て！ おかしい！ 感動の再会に脱臼が付随するのは明らか

かにおかしい！！

「美奈、美奈っ、美奈……！」

焼け付くような熱さ。気絶して目が覚めると、キスされていた。何が起こったかわからねーと思うが私にも理解できません、なんなの！？

「ちょ——んむっ、ちょ、んんっ！」

喋れんわ！

昔より少し筋肉落ちたかなーって感じのする腕。少し日に焼けた気がしないでもない肌。全く印象の合わないスペインとかそこらへんっぽい白い家。白い百合が飾ってありますけど駄洒落ですか！？

白い家だけにカサブランカですか！？

いやしかし状況が把握できない。何、何これ！？

「会いたかったっ……会いたかった、美奈……愛してる。あいしてる」

やっと口が離れた！と思ったらそんな言葉が飛び出し、二の句が告げない。すりすりと擦り寄られ、いつになく甘えたような仕草にひゅっと思を呑む。

……わ、私が死んだせいで心が洗われた！？

「こ、光輝……」

控えめに呼ぶと、光輝の目が輝いた。そして生まれて初めて見た、恐ろしく邪気の無い、天使の笑顔。……ほっ、ほんとどうしたのこの人！！鬼畜どこいったー！！

「美奈」

……！？

再び抱き締めてくる光輝。ぽたりと、精霊の衣装を着ていたせいでむき出しになった肩に雫が落ちる。ぽたりって言うかもうばたばたの域。マジで？ な、ないてる……？

生後数週間から光輝に多かれ少なかれ構われて生きてきた私は、常に受動的で、たぶん光輝を王様みたいな絶対的なものだと思っていて、多分それは勘違いで。泣いている光輝になにをしていいのか分からなくて、ただその背中に腕を回して抱き締める。

ど、どうしよう。

暫くそうしていると落ち着いたみたいで、ぎゅっと抱き締めた腕はそのままに光輝はやっと「おかえり」と呟いた。私は肩の痛みをすっかり忘れていた事に気づき、呻きつつもただいまと返す。

「ずっと、一緒に、いるよね」

「え？ あ、うん……？ 多分」

物凄い力技で来たから、そのうち呼び戻されるかもしれないし、怒られるかもしれないけどそれはそれだ。来たもん勝ちだ。

いやーしかしよくやった私。勇者召喚陣に突っ込んでまさかの逆トリップとかすごい事やらかしたなー、もう戻れん。少なくともあの大陸じゃ針の筵だ。

「よかった」

本当に嬉しそうに呟くから、戻るだとかそんな可能性は死んでも言えない。いや言ったらガチで殺られるような気がする。

「美奈、結婚しよう」

そして次に来るのがそれかよ！！

「いつ、えあ？」

いや、と言おうとしてそれが否定だと取られたら酷い目に遭うぞ
と思い直して何か言おうとして結局変な声が出ました。よくあること
です。

「言ったよね、大人になったら結婚しようって」

「い……言いましたっけ」

待つて記憶にない記憶にないそんな甘酸っぱい約束しましたっけ
！？ なんつーベタな！

「忘れた？ ……いいよ、許してあげる」

「は、はい」

「だから結婚しよう」

先生、どうしてそうなるのかわかりません！

そもそも彼と付き合った覚えもないな……ひい、16年もあんな
事されておいて私ってば1度もデレてねえ……すげえ！ イケメン
耐性だけは世界に誇れると思うよ。

「えっと、えーと、その」

断る理由も無いけど、かといって、結婚と言われてもぱつとしな
い。

……うつむ？　というか私、何しにこっちに戻って来たんだろう
か。

家族はとくに吹っ切れたし、向こうの生活も楽しいには楽しい
し——あれ？

「こ、戸籍もう無いからっ」

「別に……事実婚でも問題ないから
うん！？」

そうでした！　そうですね！
ぐるぐるとしていた思考がストップする。う、うん、どうしよう？

「そんなに嫌なら——」

うん？

「……殺そうか？　そしたら全部俺のものになるね」

「すいませんすいませんすいませんごめんなさい不束者ですが宜し
くお願いしますうつうつ！」

やつぱり光輝^{ヤンデレ}は光輝^{ヤンデレ}でしたあああああ！！

……何故かそれに安心してしまふ自分が腹立たしい！

「よかった」

ぎゅうぎゅうと抱き締められ——今度はちよっと手加減してだけ
ど——温かい感覚に、なんでか、泣きたくなる。帰ってきたんだと、
やっと実感が沸いた気がする。

ここが私の帰ってくる場所なのだ。

光輝の腕の中——間違えました。地球の、たぶん日本が。

「美奈、俺のお嫁さんになって」

「……うん」

やばい。どうしようこの子なんでこんなピュアピュアになってんの！？ 余計に性質悪いよ！ そして全然嫌じゃない自分にもびつくりだよ！

金茶色の草原。

遠くに見える街並みを懐かしく思いながら。

白い家と墓を背景に、

私にとっては36年振りで、彼にとっては5年振りの再開を果たし。

といい雰囲気描写してみたものの結局、

「美奈……いい？」

「よくない！ 全然よくない！ はじめてが野外は遠慮したい！」

そんな背景ぶちこわしで地面に押し倒されている私であった。

此処での生活は——というか光輝は、案外というか、以前に比べ

てみると凄まじく穏やかだ。悟りでも開きました？　みたいなレベ
ル。

まあどうやら、周りに他の人間が全く居ないから、のようだ。な
るほど、私の目が他に向かないからか。理解したけど納得はできな
い！　こわい！

私も昔なら兎も角、精霊になった今はあまり物欲とかそういうも
のもないし、こんな仙人じみた生活でも全く辛くない。つーかいつ
の時代の人間だ、愛する人の菩提を弔うために世間から離れるって！

此処はどこだかよくわかんないけど、前住んでたところからそう
遠くない山の中。よくこない場所見つけたなあとと思う。私が死
んでから株で荒稼ぎして家建てたらしい。すごい。

私が死んだ後くらいに大規模な経済の変化があったらしくて、そ
のお陰もあるようだ。

食材は宅配サービスで二週間に1度ほど届けて貰っている。でも
私の魔法というチートがあるので、家庭菜園を始めた。無属性の魔
力だけど、水の量の調節だとか温度調整だとか、日照の調整とか…
…まあ色々便利だ。

そんなある日の事。

「美奈、今日どうする？」

「……何が？」

「君の命日。親とか来るけど」

「あ」

………そうでした。

前回もあの後両親が来て、私は思わず霊体になって姿を隠した。よくわからないけど、会いたいのか会いたくないのか良く分からなくて。

「……うーん。顔見て、会いたかったら会う」
「そう」

光輝は親と会うことに関してはどうでもいいらしかった。私は悶々としながら霊体化して壁に潜る事に決めた。……そもそもこんななって受け入れられるのだろうかね、光輝じゃあるまいし……うん。

人間は異質を嫌う。とうに昔に諦めた家族だから、どうなろうとどうでもいい。

……そう思えてしまう自分に驚いたが、まあいいや。

「何かいい事でもあったの？」
「まあね」

十時ごろに、私の両親と光輝の両親が連れ立ってやって来た。外の私の墓で手を合わせて、白い墓標に似合わない線香を上げて、何か言っていた。

……どうしよう。全然嬉しくねえ。

「そう……良かった」
「なあ、光輝。そろそろ戻ってきてても良いんじゃないか……？」
「そうよ。美奈だって、そろそろ満足している筈だわ」

……。

「うちの娘に付き添ってくれてありがとう。でも君は、こんな所で終わっていい人間じゃない」

私の、父が言った言葉に。

どうしてか、気持ちが重くなる。憎しみのようなどす黒いものが、感じた事のないようなものが生まれて、思いがけずどろりと周囲にまで伝わる。

親たちは反射的に振り向いて私のほうを見た。

「……俺は、帰るつもりはないよ——美奈」

壁の中にいる私に呼びかけるように言う。

途端に気が晴れるのを感じた。……そういえば精霊は、感情に左右されやすい生物だ。生物と言えるのかもよくわからないけど、怒って雷を落として街ひとつ焼いたりした精霊もいる。哀しみのあまりに湖を干乾びさせた精霊も居たな。

私は無の精霊だから、そのまま空気に影響したのか。

「そ……そこに、居るの!? 美奈っ、美奈!」

私のいる壁に、母の手が触れる。……ちがう。母じゃ、ない。

もう私は、この人たちの娘ではない。

ミーナ・ハルベルンは、あなたたちの娘ではない。
美奈と私を呼ぶのは、光輝ただひとりだ。

光輝を私から奪わないで。

——彼が綺麗な笑みを浮かべるのを、どこか夢見心地で見つめていた。

4人が帰ると、壁から飛び出して実体化する。

何も考えず光輝に抱きつくつと、背中に腕が回って、もうどうしようもないくらい安心する。

「光輝……」

あたたかな体温。心臓の鼓動を聞きながら、願う。

「一緒に、いて」

「ずっとね」

「どこにも行かないで」

「ここに居るよ」

あんなに怖かったのに、今は、今は。

「……好き」

「うん」

「あ、いして、る」

「俺も、愛してるよ」

頭が、変になったかもしれない。

ただ光輝の胸に頬を寄せながら、私はぼんやりとそう思った。

カサブランカ (IF) (後書き)

依存しあってふたりしあわせなヤンデレ侵食END
ある意味ハッピーある意味バッド

ヤンデレの幼馴染が世界を滅ぼすようです (IEF) (前書き)

その6 一応現代。魔王化ルート

残酷描写多め？

ヤンデレの幼馴染が世界を滅ぼすようです (IF)

骸を抱く光輝の胸を、黒い光が貫いた。

その年、異世界から様々なものの流入が起こる。1つの強い感情に引き寄せられて、あらゆる悪夢と希望とのないまぜになった幻想が世界を踏み荒らした。

町々を怪物が襲う。

人々を助けるのは警察でも自衛隊でも軍でもなく、精霊や魔法だ。そうしてファンタジーとリアルの境目が分からなくなった頃。

突如として出現した城の頂点に、美しい男が立った。

「君がいないなら、世界なんてない」

その背後には、水晶に閉じ込められた少女の亡骸。傷は全て修復され、生きているかのように血色はいい。けれど閉じた瞳は、もう何も映さない。

「だから——……」

男は口元を歪めた。マントを翻し、水晶に腕を伸ばす。
吸い込まれるように入っていく腕は、ぎゅ、と冷たい少女を抱き
締める。

「この世の全てを捧げる。……君を、取り戻すよ」

悲哀と、

絶望と、

憎悪と、

狂おしい愛情と。

混沌としたそれらが交じり合い。

魔王は、この世界に君臨した。

美しき魔王の元に、あらゆる異形の者が集った。

また、数々の人間も彼のもとに平伏した。

彼らは、魔王に殺される事を夢見ている。

今も玉座に脚を組んで座る魔王をうつとりと見つめる彼らには、
生に対する執着は無い。彼らは既に自分というものに絶望しきって
いた人間達だ。

少数ながら、終末を見たいという奇特な者も居る。

「……北米大陸に進軍する」

光輝は、淡々とそう言った。

「派手である必要はない。夜陰に紛れ、見つからないように武器の集まる場所から徹底して破壊。大量破壊兵器の類は結界で囲って爆破しておけ。夜明けまでに攻撃力を全て削げ。交通機関、発電所、報道機関も全て午前4時までには壊滅させろ。それから、」

言葉を切ると、忠実なる配下達は胸を躍らせながら次の言葉を待つ。

立ち上がり、今度は口元を薄ら歪ませながら告げる。

「夜明け後、塵1つ残さず大陸ごと滅ぼせ」

瞬間、王の間は狂おしい熱に包まれる。魔物も人間も共に腕を振り上げて歓喜し、口々に王を讃えていた。

北米大陸が突如として灰燼に帰し、ついでに海に帰った。

そんな事実をテレビで見て、とある青年があんぐりと口を開けていた。

「マジで!？」

1人暮らしの部屋。壁際に立てかけられているのは、最近実用化された魔法の杖だ。真っ先に製造に成功したのはファンタジー脳と名高い日本人で、この青年の使っている杖は最近杖製造にも手を出し始めたYA。AHAの製品である。

Y。MAHAは楽器を始めとして、幅広い分野に事業を広げている。まず魔法をそれらに転用する予定で研究が始まり、結果として

その副産物である魔法の杖が売っていた。

金属製の黒い杖は、グリップの上の方が円柱状にやや太くなっていて、制御のためのタッチパネルが付いている。

ちなみに腕時計型などのコンパクトな物もあるが、青年は1番安い杖型を購入した。魔法の扱いが上手いのでそこそこバイトで稼げているが、なんだかねで苦学生なのである。

「え、ええー、やべえようすんのこれ。人類滅亡フラグがビンビンだよ」

テレビに映されているのは、世界に配信されていたため残っていたライブカメラの映像だ。悲鳴を上げて逃げ惑う人間を蹂躪する、物語に出てくるような魔物。

これが現実でなければ、つまらないB級映画だと笑ってしまえたような光景。

「……どーすっかなあ」

氏原三義。今年21歳の、しがない大学生である。

とりあえず人類の滅亡について、言えることは1つだけ。

マジか、である。

北米大陸が滅亡した後、今度は地続きである南米が滅ぼされた。そんな中、国単位で魔王に従属しようとしたのが某独裁国家である。

「……浅ましい」

魔王はそう言い放ち、更に国ごと滅ぼされた。
この事件で、魔王に従う事も悪い結果しか呼ばないと認識が広がり。

人類は必死の抵抗を始めたのである。

「おいおい、マジかよ」

それから数週間後、バイトの帰りにポストに入っていた手紙を発見して三義はそう言った。

部屋に入ってベッドに転がり、封を切る。

入っていたのは、なんと防衛省からの手紙である。

以前なら笑い飛ばしていたような内容だが、勇者を探す事になったらしい。

お告げによると、勇者は今年21歳の男性だという。

「めんどくせえ……」

日本中の21歳男性はそれぞれが県内の会場に集まり、勇者を探す。

人によっては喜ぶかもしれないが、三義はその日にもバイトを入れていた事を思い出して嫌な顔をした。

「大体、体のいい生贄じゃねえかよ、勇者なんて」

ぶつぶつと言いつつも、国からの命令には逆らえない。

それが氏原三義であつた。

次に滅ぼされたのはオーストラリア大陸から東南アジアである。
台湾までは滅びたのだが、何故か日本に属する島はひとつも滅んでいない。

その事に何故か批難が集まったりもしたものの、世界は今日も危機に包まれている。

「美奈」

水晶の中から、眠っているかのような少女を引き出す。魔法で時を止めているその体を大事そうに抱き締め、光輝は愛しげにその首筋に触れた。

「日本は最後にしようね。美奈との思い出の場所だから」

故郷ですら、そんな認識でしかないのだ。

光輝はそつと美奈の体を水晶に収めると、世界を滅ぼす算段をするために部屋を出ていった。

「マジで!?!」

氏原三義は目を見開き、思わず手にしていた魔法制御杖を取り落とした。

「は、はい。ゆ、勇者です。間違いありません!」

派遣されてきた調査官の女性は、目を潤ませて叫ぶように言った。

「うっわ……」

思えば昔からこういう役回りだった。名誉あると見せかけてやる側には面倒極まりない役割ばかりやらされる。

貧乏籤体質ここに極まれり、と彼は溜息を吐いた。

「勇者……？」

日本に勇者が現れたと聞いた光輝は、すっと目を細める。

「人類の希望、ね」

そして口元を笑みの形に歪め、配下に向かって言う。

「適度に負けた振りをしながら誘導して」

「――畏まりました」

配下は恍惚とした目で、その命令を受け取った。

「太平洋のド真ん中に、城？」
「はい」

三義はいまいち勇者らしくない黒い杖を片手で持ち、はあ、と溜息を吐く。

勇者になって数週間経った。なにやら授けられた力で戦ったり修行したりと活動しているが。魔物に対しての攻撃力が高いため、海外からの依頼も多い。

けれど、やはり根元を叩くのが好ましい。そういう訳で魔王の住居を搜索していたが――漸く、その本部が割れたようだ。

「……じゃ、そろそろか」

正直なところ、勝てる気はしない。

けれど幾人もを救い感謝されてきた今、世界を見捨てるという選択肢は選り難かった。

そして一カ月後――三義率いる討伐軍が、太平洋の中心に向かって出発した。

太平洋の中心に、禍々しい城を中心に抱く島がある。

木々や草花ですら暗色で、行き交う異形の者たちが更にその禍々しさを上げている。

城は黒を中心にデザインされ、所々に白い髑髏の意匠があったり、崩れていたり、血のようなものが付着していたりする。

「美奈」

その城のかなり高い場所に、魔王の私室がある。

光輝は何度も冷たい頬や額に口付けを落とし、名残惜しげに美奈を水晶に戻す。

この水晶に干渉できるのは、光輝ただひとりである。他の者が触れれば、例えそれが神であろうとも焼き殺す。

「……もう少し待っててね」

指先で、更に水晶の表面に呪を刻む。

——もし自分が死んだとき、彼女が何者にも触れられないよう、水晶ごと消え去るように。

勇者が島に上陸した。

数百艘もの艦隊を従えて来たというのに、既に勇者の乗る艦しか残っていない。

とはいえ彼らは死ぬ覚悟をしてきているし、最大戦力は残った艦に集められていた。

「ついにか……」

三義は相変わらずの杖を手に、服装だけは魔法と科学の最新技術を駆使したものを身に着けている。周りには各国の精鋭たちが集まっていた。

「大丈夫よ、ミツヨシ」

そう声を掛けたのは、ポーランド出身の女性。回復系の魔法を得意とする元外科医だ。

「そつだよ。きっと行けるさ」

と笑いながら言った青年は、アメリカ出身で、攻撃魔法を得意とする。チーム最年少の18歳だが、サバイバルゲームオタクで、銃型杖を扱う事にかけては天才的だ。アメリカが壊滅した時には海外留学中だった。

「……頑張ろうぜ？」

緊張しているのか少し表情の堅い、肌の黒いショートカットの女性。魔法を生かした体術を得意としている。アフリカの出身だが、自力で海外を渡り歩き、ストリートファイトで鍛えた強者だ。

魔法による通訳は、ほぼリアルタイムで言葉を変換してくれる。そのお陰で、こうした多国籍の集団でも随分コミュニケーションが楽になった。

主力である勇者チームはたった10人ではあるが、更に数千人連れて来ている。船で攻撃する事は無謀だと既に判明しているため、戦闘員と後方支援が殆どである。

——だが、もう後は無い。

正直なところ、本来は艦隊がほぼ全滅状態になった時点で撤退するべきなのだ。しかし、この討伐軍に撤退という選択肢はない。それはもう、負けたと認めているようなものだ。

（勝てる気がしねえー）

勇者としての力を使えば、どうやら異世界に飛ぶことも出来そうだと彼は推測している。逃げたいという気持ちが正直なところだ。けれど、母国であんな盛大に送り出されてしまったてはそうするのも心が痛い。

(……まあ、俺が死んだ後の事は知らん)

あとはもう玉碎覚悟で戦うしかないのだ。

三義は人知れず溜息を吐き、戦いを潜り抜けても傷1つ付いていないYAMA。A製魔法制御杖を握り締めた。

勇者率いる10人は順調に玉座への歩を進めていた。

——城の外で、数千人も部隊が壊滅し、後方支援部隊も艦ごと沈んだ事を知らず。

——更にこの時、アフリカ大陸が海の藻屑と消えた事も知らずに。

「ようこそ、勇者」

魔王は、その一言と共に三義以外の9人の命を刈り取った。

ごとん、と首が地面に落ち、血を噴出しながら次々に体も倒れていく。

「え」

三義は呆然として立ち竦んだ。

魔王は黒髪に黒い目で、些か整いすぎて人外染みてはいるが、アジア系、というより日本人の顔立ちをしている。

「冥土の土産に教えてあげるよ。君の乗ってきた艦は撃沈、後方支援と戦闘部隊は全員死亡。君しか残っていないし、たったさっきアフリカを滅ぼした所だ」

「は……!？」

「カメラ、付いてるよね？」

——三義の杖には小型カメラが付いている。魔法技術も併用したそれは、常に母国に映像を送信していた。

気づけば三義の手には、慣れ親しんだ黒い杖は無い。

「有効活用させて貰うよ」

光輝は魔法で引き寄せた杖を右手に持ち、とん、と床に付いて固定する。

そして魔法の術式を僅かに弄った。

——この日、半日にも渡る映像が世界中のあらゆる映像機器やパソコンに送信された。

電源を切る事も止めることも出来ないまま流された映像。

勇者を拷問し、痛めつけ、その絶叫を余す事無く響かせ、気絶できないように回復しては痛めつけ続け、四肢を切り取り、最後に心臓を抉り取った。

恐怖に歪んだ顔のまま、口に心臓を押し込まれた凄惨な死に顔。何故か音量を下げる事も出来ず、町中にその絶叫が響いた。

そうして人類は、最後の希望を失った。

光輝は血に濡れた体を無表情のまま清める。

早く美奈の顔を見たい。しかし、他人の——しかも男の血に濡れた汚い体のままで彼女に触れるなど、許しがたい事だ。

勇者を殺しても、歓喜など少しも沸いてこない。

強いて言うなら、これで少し人類の滅亡が早まったか、と思う程度である。

「……落ちない」

いくら洗っても臭いが落ちない。

魔王となってから鋭敏になった嗅覚は、いつまでもしつこく血の臭いを感じ取る。

擦る。擦る。擦る。

その白い肌が擦れて血が流れる頃、漸く彼は満足したのであった。

勇者の死後、ついにユーラシア大陸が海に沈んだ。
更に北極と南極までもが滅ぼされる。

地球には、日本列島のみが残されていた。

いつ滅ぼされるのかという恐怖に包まれながら。

「やあ」

“あの日”から恐怖に脅えていた少女は、その姿を見て恐怖に全身を震わせた。

「あ……あ、ああ……あ」

がたがたと震え、呼吸が浅くなり、痩せ細った手で体を抱く。

「明日を楽しみにしていて」

黒髪の美しい男。それが魔王だと、少女は知っていた。

世界の殆どが海に沈み、

人類ばかりか地上の生物が殆ど滅び、

そしてこの日本を滅ぼそうとしている男。

「地球の生物は悉く滅ぼす。最後まで見ていてもらっよう」

そう言っただけで光輝は、脅えて声も出せない少女に——美奈を殺した少女に、不死の呪いを掛けた。

彼女は見届けねばならない。

1人の男を狂気に走らせた責任を果たさなければいけない。

耳を塞いだ時、既にその一室には誰も居なくなっていた。

明朝に北海道。

午前9時、本州。

正午、四国。

午後2時、九州。

そして午後5時、沖縄。

順当に滅び行く故郷を、遙か高みから光輝が見つめていた。

地上にはもうほんの少しの大地も無く、宇宙から眺めれば青と白しかなくなっているだろう。

光輝はふと上を見上げ、遙か空の上にある——しかし彼には視認できる、宇宙に存在する衛星や宇宙ステーションを消していない事に気づいた。

「これ也不需要ない」

手を一振りすると、全て塵1つ残さずに消えた。

「あ、ああ、ああ……ひ、ひい」

何故自分が死んでいないのか、彼女には理解できなかった。
理解できないなりに、それが自分への罰であるとは分かっているが。

死の苦痛を受けたのに、何故か空から滅びを見つめていた。

そして最後の島が消え去る。

（あ、あ、あああ、ぼ、ボクの、せい、違っ、ちがう、違っっ！！）

地上に人類はもういない。そもそも地上が全て海から消えたのだ。
少女は恐怖に顔を引き攣らせ、後悔に包まれながら漸く、生から

開放された。

光輝は城に戻り、塔の天辺から大海原を見下ろす。

最早太平洋も大西洋もインド洋も同じになり、見分けは付かない。

「……」

ちらりと一瞥したのは、勇者の持っていた杖だ。

光輝はそれを手に取り、ダーツでもするかのような気軽さで投げる。

海に消える杖。

同時に、海中の生物は消え去り、あれだけあった海水がその周囲から蒸発して消えた。

残ったのは、水気のない茶色の大地のみ。

そして最後の仕事。

王の間に行儀良く並ぶ魔物や人間たちを、それぞれが望む方法で殺していく。

島の中に生命の気配がなくなると、光輝は体を魔法で清めてから島ごと再構成した。

以前よりやや広くなった大地には、草木が生い茂る平和な光景が広がる。

更に、島の中に幾つか山や森、湖や滝、川などを作った。

同時に、光輝は新たに世界に海水を満たし、大陸や島を幾つか作

り、植物を生やす。

動物だけが存在しない、真新しいようにも見える星が出来上がった。

大地の創造を終えると、島の中心部の祭壇にある水晶に触れる。

「やっと……」

水晶が融け、地面に幾何学的に広がって模様を描く。

ゆつくりと倒れてくる美奈を抱き締めると、闇が頭上から降ってきた。

『成し遂げたか。はは、狂人だな』

「……御託は良い。早く」

『いいだろう——神は始末した。この世界に、新たな生命を与えよう』

彼は、この世界に侵食した——正しくはこの世界を侵略した、異世界の最高神だ。

最高神でありながら闇の神でもある。

文化の違いというものか、そちらの世界では闇こそが尊ばれ、人々は光を嫌うのだという。

舞い降りた闇の最高神は、この世のものとは思えぬ姿をしている。内蔵と血管とをバラバラにして押し固め、そこに蚯蚓を何匹も追加し、更に蟲のような脚と幾つもの目玉を追加したような姿。

何時見ても怖気が立つ、と光輝は思った。

「終わったら早くどこかに行け」

『む、酷いではないか。……人型生物はいらんのだな？』

「いらぬ。動物だけでいいし、できるだけ元の様子から離れた方がいい」

『難しいな……進化というのは世界に組み込まれているのだ。どう頑張ってもそのうち元の姿に行き着く』

闇の神はそのおぞましい触手を広げ、世界に生命を振り撒いていく。

光輝はただ、微笑んで手を振り上げた。

「構わないよ」

『ほう？』

「だったらこの島には近づけない」

島が、浮かんでいく。

なるほどと納得した様子の闇神は、最後に美奈の体に新たな生命を宿す。

——光輝と同じ時を生きられるように、かなり多めに。

彼女の体で干乾びたようになっていた魂が、再び力を取り戻した。

美奈の体にゆっくりと温度が戻り、光輝はますますその体を抱き締める。

「早く帰れ」

『本当に酷いやつだな。ではこの世界、任せたぞ』

神が去っていく。そして、光輝が新たな神となる。

それが異界の神が他界を侵略する時の手順なのだそうだ。

世界で尤も強い感情を持っていた生命体に力を与えて世界を滅ぼさせ、そのまま神とする。そしてその地を任せるのだという。

「美奈……」

光輝は祭壇のあった場所に、白い家を創造した。
大きくも小さくもなく、元々住んでいた光輝の家に近い形をして
いる。

その島はまるで、楽園。

——ゆっくりと美奈が、その瞼を上げた。

もしも彼女が生きていたら (IF) (前書き)

美奈生存ルートなIF。

現代恋愛。格段に平和です。

もしも彼女が生きていたら (IF)

● 16歳

「美奈も結婚できる年だね」

「そ、それが？」

「……残念だな。俺が2年早く生まれていれば」

「ちよつ、そうだったらどうする気なの！？ ねえ！」

● 17歳

「修学旅行、また同じ班だね」

「脅してたけどね。あはは、は、はは……台湾かぁ」

「美奈、向こうの言葉は喋れないよね。大丈夫、美奈が喋らなくて
もいいように、当日までに覚えておくから」

「ひいひいひいっ」

● 18歳

「……美奈、おいで」

「……っひ」

にこりと微笑む顔が恐ろしい。美奈は後退り、がたがたと震えていた。

「ほら、早くサインしてよ」

「む……無理っ、無理だよ、そんなの」
「拒むの？」

首を傾げる光輝。その目のドス黒さに似合わない仕草に、美奈は首を全力で横に振った。

「むむむ無理だつてばああ!! そんな有名大学うつう!!」
「無理じゃないよ。これから叩き込んであげるから」
「無うつう理iiiiiiii!!」

光輝の手に握られた出願書類。結局震える手で名前を書かされたのであった。

● 19 歳

「受かるとは思わなかった」
「俺が教師なんだから、受かるに決まってるよ」
「いや、体に覚えこまされたらねえ……」

未だに受験勉強の間に受けた数々の拷も……お仕置きの数々を思い出すと体の節々が痛むような気がする。骨折の1つもしていないのが奇跡のように思えた。

「いいのかな……サークルのひとつも入らないで」

「参加させると思ってるの？」
「すいませんでした」

ギリギリと手首の内側に爪を立ててくる幼馴染を見ながら、溜息を吐く。

私服を着ているとますます見た目のいい光輝は、最初の頃凄まじいモテようで、美奈も随分ととばかりを食らった。光輝のストーリーに殺されかけたこともあるが、その時は光輝が必要以上に叩きのめしたので九死に一生を得た。

あれはまさに地獄絵図だった。美奈は既に片腕にアイスピックが刺さり、もう片方の腕も包丁で切られ、失血で朦朧としていた所に光輝が助けに来たのだ。

美奈を殺しかけたのは勿論、そもそも美奈に触れた時点で彼の逆鱗に触れている。その後、手こそ出さなかったが凄まじい言葉で叩きのめし、彼女は殆ど抜け殻のようになって殺人未遂で連行された。

「……光輝、」

「何？」

「なんか食べて帰ろうか」

なんだかんだで美奈は光輝を見捨てない。逃げることも出来なくはないのだが、結局は許してしまうのだ。

それは幼馴染だからなのか、それとも別の理由があるのか。

2人には分からないし、分かる必要もなかった。

● 20 歳

「……つぎ」

光輝は信じがたいものを見たような目で、その光景を見ていた。

「美奈」

「ん……」

ほんのりと赤く染まった頬、潤んだ瞳、半開きになった唇から覗く赤い舌、ずり落ちた服から覗く白い肩や胸元。

色づいた指先が、ぐい、と光輝の胸元を引っ張った。

「さむい……」

光輝は初めて美奈から歩み寄られて、どうしていいのかわからなくなつた。

とりあえずその細い肩を抱き寄せる。

「光輝……、こーき」

「……何？」

美奈は縋るように抱きついて、とろんとした目で光輝を見上げる。

「どー、して……」

ふわふわとした気持ちに任せて言おうとした言葉は、途中で途切れた。

「美奈？」

どうやら眠ってしまったらしい。光輝は美奈の額にキスを落とすと、テーブルに残っていたチューハイの残りを飲み干した。

● 21歳

「あれ？」

美奈は純白のドレスを着て、思わず首をかしげた。

（何で結婚する事に……あれ？　そもそも付き合ってたっけ？　いや、同棲はしてたな）

大学入学と同時に1人暮らしを始めようとした2人を、双方の親が「じゃあ一緒に暮らせばいいじゃない」と同じアパートに押し込めたのはつい数年前だ。

特に何がある訳でも無い。同じ家に居るといつても部屋は別だし、うっかり肉体関係となる事もなかった。光輝の方は随分喜んでいたが、美奈としてはまあ可もなく不可もない。

（……………あ）

美奈は数日前うっかり口を滑らせた事に思い至った。

——だったら何で、何もしないの！

珍しく力で押し切られず口論になった最中、つるりと口が滑ってそんな事を言ったのである。そして光輝に首を傾げられて、ついっいこう続けた。

——女として好きなんじゃないでしょ！？　だって、き、キスとか何もしないし！

思い切り勢いに任せた一言だった。その言葉にすっかり光輝を燃え上がらせてしまつてついに21年もの均衡を破つて色々とされたのは不覚としか言い様がない。

美奈の方も頭がぐるぐるとしていて、訳の分からない事を口走つたとは反省している。そもそも愛してると言いながらそういう意味で手を出されなかったのは、せめてもの彼の気遣いなのだ。それを崩す事を言つたのは自分である。

だからといって、何故3日後にドレスを試着しているのだろうか。

気が早すぎるのではないだろうか。

「……ま、いいか」

「お似合いですよぉ」

細かいことは気にしないのが吉だと21年の人生で学んだ美奈は、溜息を吐くのみだった。

● 22歳

「卒論終わつたああああ！」

「お疲れさま」

「ひつ、光輝が優しい」

「……何それ。俺が優しくくないって？」

「いいいいやそんな事は無くて！……っあなた！」

「……ふふ」

「（最近これ言つと機嫌が直るなあ……）」

● 23 歳

「いつてらっしゃい」

「いつてきます」

卒業したらどうなるかと思ったが、専業主婦生活というのは以前より自由だった。掃除選択と食事の用意に加え、一人で気ままに買い物に行けるのが楽だ。

染み付いた癖というのは難儀なもので、自然と男性を避けてしまふのだが、恐怖症という程ではないのでさしたる問題はない。

また外界との接触が減ったからか、ここところは光輝も随分穏やかだ。

無論彼に他の女の気配がある訳もないし、夫婦となってからは生活も関係も落ち着いたものである。

といっても以前の彼が完全に成りを潜めるにはまだ掛かるかもしれないが。

「……まあ、結果オーライか」

程よい距離と、確実な繋がりというものが必要だったのかもしれない。

そんな事を思いつつ、美奈は今日も掃除に精を出すのであった。

● 24 歳

「こ………光輝」

美奈は両手を握り締め、ここが私の関ヶ原だと言わんばかりの決死の表情で声を掛けた。

「何？」

帰宅した夫の姿は相変わらず若々しく美しい。美奈は数秒躊躇った後、口を開いた。

「妊娠した」

数秒、沈黙が降りる。

美奈はごくりと唾を飲んだ。——喜んでくれるだろうか。正直、自信が無い。

「……俺の？」

「うん」

「俺と、美奈の」

「うん」

「子供」

光輝は僅かに戸惑っているように見えた。美奈にとっては初めて見る表情だ。

「そっだよ」

「……そっか」

どちらからともなく歩み寄ると、光輝の腕がいつにない優しい手付きで背中に回る。

変わったなあ、と美奈は場違いにも感心した。

「……美奈にそっくりな女の子がいい」
「そう？」

「俺に似た男だったら、間違いなく近親相姦に走ると思う」
「いやいやいやいや」

しかしうるたえながら末恐ろしい事を言うあたり、やはり光輝は
光輝なのだった。

● 25歳

「よしよし、いい子いい子」

「あーう」

「いい子だから首にしがみ付かないでー、超苦しい」

「だー」

「ぐえあつ！……ッ父親に似て……光輝、どうしたの？」

「必死に手が出そうなのを抑えてるだけだよ」

「ひいつ」

● 26歳

「満樹」

「あい」

「お前には幼馴染が居なくて良かった」

「？」

「……俺みたいにならなくて良かったよ」

● 27 歳

「光輝……」

「……」

「ぱーぱ」

「口引っ張られてる所悪いんだけど、あの」

「あに？（何？）」

「くっ……そのね、妊娠したの」

「！」

「次は女の子が良いね」

「ほうらね（そうだね）」

● 28 歳

「美紗にしよう」

「うん」

「……美奈に似てるね」

「そうかなー」

「こんな感じの赤ん坊だった」

「覚えてんの！？」

● 29 歳

「美紗、かわいい」

「うー？」

「美紗、美紗……ずっと一緒だよ」
「あう」

「……どうしよう……今更ながら光輝の言葉を信じるべきだったと」
「全くだね」
「まさか妹に矛先が……」

● 30 歳

「顔といい成績といい、生き写しだね」

「そう？ 満樹も、耳とか頭の形とか口元とか足の指とか、美奈に似てると思うけど」

「……いや、そんな所まで見てるの？」

「美紗は美奈にそっくりだね」

「……そう？ 眉のしゅつとした感じとか、鼻とか、光輝に似てると思うけど」

「そんなに見てくれたんだ」

「え？ あ、……うん？」

● 31 歳

「ぱぱー」

「……」

「父親にデレる美紗は可愛いんだけど、満樹の目が完全に光輝そっくりで怖い」

「ははは」

「はははじゃないっての……」

● 32歳

「いい？ 満樹、兄と妹は結婚できないの」

「知ってるよ」

「そうよね…… ああ、なんだかとても不安を煽られるわ」

「大丈夫。かあさんの事も愛してるよ」

「7歳の子供が愛してるなんて言うもんじゃないってば。あなたの父親じゃあるまいし」

「何で？」

「あああそつくり……どうしようこれ」

「美紗、お兄ちゃんに屈しちゃいけないよ」

「くっする？」

「お兄ちゃんの言いなりになっちゃ駄目だよ。多少言っ事は聞くべきだけど」

「うん！」

「美紗はお母さんにそっくりで良いね。可愛いよ」

「かーいい？」

「可愛いよ」

「ぱぱ大好きー！」

● 33歳

「俺なんて最初に喋った言葉は“美奈”だったよ」

「つく……!!」

「負けたね、満樹。残念ながら美紗の最初の言葉は“パパ”だ」

「卑怯者め!」

「“愛してる”は2歳で覚えたり、3歳の頃に美奈にも言わせたし、4歳でプロポーズしたよ」

「年の差なんて!」

「年の差以前の問題だと思うわ」

● 34歳

「美紗、愛してるよ」

「うん? あたしもお兄ちゃん、好きー」

「……言ったね?」

「ちよつ、言質取ってる! あれをネタに一生粘る気だわ!」

「流石俺の子」

● 35歳

「美奈……」

最近……というかここ十年ほど油断していた美奈は、ベッドの上で全力で後悔していた。

「随分、仲が良さそうだったね」

「あれは美紗の担任の……」
「知ってるよ」

首筋に、久しく感じていなかった痛みが走る。ぎゅっと目を瞑ると、くすくすと笑う声。

「……男が担任だから、出来るだけ俺が行くって、言ったよね？」
「い、言いました」
「へえ、覚えてるのに」

ぐ、と繋がった手に爪が刺さる。

「ねえ、美奈」
「うつ……だって、無理があるでしょ……」
「そうだね。でも、連絡くらいしてくれないと——」
「ツッ！」

片手を持ち上げられたかと思うと、小指の先を噛まれる。

「食べちゃうよ」

落ち着いたかと思っていたが、やはり彼は彼で、根底の部分は変わっていないのだ。
けれど——

冗談ではなさそうなその瞳を、美奈は以前とは違う心境で見上げた。

「海外旅行、行こうか」

「……え」

「2人でね。ああ、満樹と美紗は実家に預けて行こう。たまには父さんたちとも過ごさせてあげないと」

「いや、光輝からそんなまともな発言が……どこの国？」

「フランスとかどうかな。ああ、喋れないよね？ 大丈夫、俺とだけ話せばいいから」

「あれれデジャヴが」

● 37歳

「……光輝」

「何？」

「愛してる」

ソファの後ろから抱き付いて、少し酒の匂いのする美奈が言った。光輝は素面で無い事を少し残念に思いつつ、振り向いて口付ける。

「俺も。ずっとね」

もしも彼女が生きていたら (IF) (後書き)

当作品随一の平和なルートでした
まさかの更正

魔王外伝　く元魔王だけど、マゲロ漁船に乗る事にしたく（前書き）

本編後番外編です。

魔王外伝　く元魔王だけど、マゲロ漁船に乗る事にしたく

「どりゃああああーっ!!」

とある町のとある酒場の前に、凄まじい勢いで鮪を捌いている男が居た。

ざんばらになった黒髪は乱れ、鬼気迫る表情で魔導刀を振るっている。

「おらっ！」

空中に放り投げられた鮪は、丸ごと刺身の盛り付けのようになってまな板に着地する。

見ていた観客たちはキラキラと目を輝かせ、歓声を上げて拍手した。

「すげーっ！　兄ちゃん、すげえな！　何だそれ！」

「うわー美味そう！　食っていい!？」

「あんた、何もんだい？　うちで働かない？」

男はニツと笑い、白い歯を見せて笑った。

「ミツヨシ・ウジハラだ。そんな事よりこれ食って、ついでに中で飯食ってってくれよ！」

——そう、彼こそが氏原三義、元魔王現漁師見習い兼酒場店員だ。

彼の人生は、１９歳まではやや不幸ぎみでありながら平凡だった。

彼は父母と祖父、兄と姉が１人ずつの家庭に生まれた。

地元の小学校と中学校と高校に通い、騒がしくはないが大人しくもなく、クラスでは二軍程度の地位で、化学が苦手で、ライトなオタクで、まあようするによくいる若者だった。

可もなく不可もない容姿。成績もそこそこ。運動は、及第点程度。やたら転び易く、周に一度は飛来したボールに当たり、何故か毎年何かしらの実行委員にされていた。そんな感じの不幸レベルである。

やがてそこそこの私立大学に進学した１９歳の時。

その日は朝方まで友人とゲームに興じていて、学校に行こう、ふらふらとドアを開いた、その瞬間のことである。

一瞬にして彼の世界は変わった。

気づいたら玉座に座り、両脇に立った美女に絡みつかれ、頭にはなにやら禍々しい王冠、眼前の赤いカーペット、そして部屋に並ぶ異形の者達。

彼は叫ぶでもなく、泣くでもなく——気絶した。

そんな小心者の彼であるが、目が覚めて説明を受け終えた頃には何故だか彼らに嫌悪や恐怖を感じる事など微塵もなくなっていた。むしろ、彼らが跪くことが心地よくすらある。

どうやらそれが魔王の力を持つと言う事らしかった。

平凡だった彼は一変して王となった。

魔王を自在に操れる。体も以前と違って格段によく動く。力も増した。魅力も増しているらしく、国内に居た女たちはこぞって彼にキラキラとした目を向けるようになった。

しかし三義の性格上、女性への免疫が無いので大変困ったが、それはそれだ。

やがて力が殆ど蘇った頃、遠い国に元の世界の波動——雰囲気のようなものを感じた。どうやら精霊らしい。恐らく前世が三義の世界の人間だったのだろう。

少し会ってみたいと思ったが、城から出歩くと女性が群がるので嫌だ。なので結局放って置いたのだが、彼は魔王の願いを全力で叶える部下達の事を失念していた。

そんなある年、勇者が召喚された。

しかし来るまでにはまだ随分時間があったし、気にはいかなかった。魔王としての思考なのか、負けたら負けたで構わないという考えである。

そして召喚されたその日に、部下が精霊を攫ってきた。どうやら本当に日本出身の、しかも元女子高生だという。三義の心は躍った。人並みに女子高生は好きである。

その精霊、美奈とは随分気が合った。とても話が合うのだ。いつ

しか、三義は彼女の事を好きになっていたのかもしれない。喜ばせてあげたくて、元の世界から物を召喚してみたりした。

と、その日に勇者が襲来した。美奈は勇者に取られ、彼自身思い出したくも無いような、未だに怖気の立つような目に合った。

地獄の1日が終わると、筋骨隆々のオネエ系マツチョ集団に連れ帰られた。その後必死に脱出し、辿り付いたのが大陸の端にある港町である。

未だ恐怖に脅える頭で彼はこう考えた。

——そうだ、海に逃げよう。

こうして彼はマグロ漁船の漁師達に頼み込み、1年の殆どを船の上で生活するようになり、3年が経った。

魔法の扱いが上手く、力もある彼はみるみるうちに信頼されるようになった。今となっては良く焼けた肌に白い歯が眩しい海の男である。

この街には元の世界のように生魚を食べる文化があり、彼にとってはまさに故郷を思い出せる最高の地だった。

今日も彼は船に乗り、陸に上がってはマグロを捌いてみせ、鍛え上げられた体を見せ付けるように上半身裸で笑う。

若干例の筋肉集団に近づいている事については、彼も気づかないのであった。

「ミッ！」

「おう、ケーラ。仕事はもういいのか？」

一仕事終え、タオルで額を拭いていた三義に抱きつく少女が居た。年頃は18歳程だろうか、小麦色の肌に金髪の可愛い少女である。

「うん！ ねえ、ミツも休憩にしよう」

「そうだな。そろそろメシ時だ」

（っはー、たまんねーなおい！ 何これ、エロゲなの？ エロゲ？）

さわやかな笑顔と裏腹にそんな事を考えつつ、腕に抱きついてくる少女のやわらかさに若干鼻の下を伸ばす三義。

数年後、ケーラには振られたが近所の眼鏡美人と結婚し、尻に敷かれつつ彼は幸せな一生を送ったという。

ちなみに魔王になった時点でかなり寿命は延びていたが、その点については誠心誠意妻に説明して許してもらい、元冒険者だったという妻と共にドラゴンの血で乾杯したりとなかなか波乱万丈の人生だったようだ。

元魔王だけど、マグロ漁船に乗ることにした。

妻に尻に敷かれてるけど、わりと幸せです。

数十年後、そんな手紙がどこぞの勇者夫婦に届いたらしい。そして勿論妻の目に触れる前に破り捨てられたという。

魔王外伝 〱元魔王だけど、マゲロ漁船に乗る事にした〱（後書き）

何をされたか？
禁則事項です。

黒宰相謀反未遂顛末（前書き）

転生後の後日談のようなもの

黒宰相謀反未遂顛末

現皇帝ディオ・メレーデンス・エレゲイアはぼかんと口を開けたまま固まっていた。

目の前に立つ人間が発した言葉が、あまりにも信じがたかったためだ。

「ま、待て、もう一回言ってくれ」

「エノン・レーヴィン宰相が、む、謀反を！」

言っている方も信じられないという顔をしている。
開いた口が塞がらないとはこの事だった。

エノンはディオの学生時代からの親友である。

頭は固いわけでもないしそれなりにユーモアもある。目の下のクマさえ消えればそれなりに綺麗な後妻を迎えられるだろうに、仕事を愛するあまりにそれも考えないようだった。

そう、彼は仕事が好きなのだ。

仕事狂いと言ってもいい程に。

「書類は！？ …… もう無いのか！ 分かった、視察に行ってくる！」

「閣下あああつ、そろそろ休んでくださいってば！」

「うるさい仕事持つてこいっ！！」

あまりに仕事が好きすぎて、こんな調子なのである。

普通の公務員では満足できない仕事量らしく、ただ仕事だけを求めて出世してあつという間に宰相にまで上り詰め、常にあるクマのせいで黒宰相と呼ばれるまで働き詰めの男。

彼にあるのは仕事欲だけだ。

宰相である今、出世欲も消えうせた。食欲と睡眠欲もあるかどうか定かではない。娘が居るから、一応性欲の方はあつたのかもしれない。しかし物欲は極めて薄いだろう。

と、誰しもが思っていた。

「嘘だろ！？ 嘘だよな！？ だって仕事できなくなるだろ！」

「い、いえ、もしかするときつと今度は皇帝として更に大きな仕事をしてみたくなったのでは」

「…… 納得しちまつたじゃねえかオイ！」

「そ、それより問題は——」

「分かつてる。言つな」

突然真顔に戻ると、ディオは椅子を跳ね飛ばすように立ち上がる。

「臨時公務員を200人ほど雇え！ 仕事が回らなくなる！」

1人で200人の働きをする男、エノン・レーヴィン。

その彼の謀反は、色んな意味で城に激震を走らせたのであった。

更に、父親と繋がっている可能性があるため、現在皇太子と同じ学校に通うエノンの娘が連行される運びとなったが、なんとその彼女が何者かに攫われた。

黒髪に銀色の目をしていたらしく、血縁関係があるとも見られ、どちらかといえば共謀者により救出されたと見る者の方が多かったが――

「まさか。俺がしっかり見てたんだから、天地が引っくり返ってもありえない」

という皇太子の言葉で一応疑われない事になった。というか疑ったら容赦なく鉄槌が下されそうな雰囲気であった。

確かに、彼はエノンの娘、ミリシアナとほぼ1日中行動を共にし、目を離してはいない。離れる時間であっても、彼女に持たせている道具で密かに監視している。

魔法の使用は感知できるし、他人と接触しても分かるようになってる。

無論彼は疑いを持って監視していた訳では無い。どちらかといえば、悪い虫が付かないようにだ。

ここ数日間の記録を見ても、ミリシアナはただ実験などを繰り返して、時折レポートを書いたりノートに何か書き留めたりしたくらいだ。あとはコウキに構われている。

ちなみに音声は入らないが、行動はある程度文章化されて出てくる。

そしてその最後の記録に、俄かに周囲が沸いた。

「き、求婚されたのですか!？」

「ああ、うん」

何て間の悪い——と、彼らが思ってしまった事は責められないが、コウキ皇太子殿下は、とてつもなく邪悪な艶笑を浮かべた。

「会ったら、お仕置きかな」

その場に居た全員が一瞬体を強張らせ、背筋に走った寒気に思わず手を握り締め、ついでに件の彼女に全身全霊で同情してしまったのは言うまでもない。

その後彼は単身で、ミリシアナの魔力を追跡して転移するという離れ業をその場で開発して見事に救出してきた。

連れ帰られた彼女が嫌にげっそりとしていたのは気のせいではないだろう。

「エノン・レーヴィンには魔法で洗脳された痕跡がありました。今は正気のようにです」

「そう」

エノンは未だに牢に居るが、既に正気に戻っている。問題は、真犯人を見つけないといけないという事だ。

洗脳の痕跡については立証された。ならば、それを誰がやったのか。

無論コウキとミリシアナは知っているが、流石にその犯人を捕えるのは難しい。長期的に見れば不可能でもないかもしれないが。

——現時点、国からすれば内憂か外患か、そのどちらかも分から

ないのだ。不安要素を抱えたままにしているのは良くない事態である。

「と言う訳で、対策を考えました」

「ほう？」

コウキが考えた手段というのは非常に大胆、かつバレればとてつもなく危険な物であった。

まず、ミリシアナが攫われた場所が魔王城（榮魔殿）だというのは既に知れ渡っている。

うっかりというか、普通に口に出してしまったためだ。犯人については秘匿してあったが、こういう事にした。

「古の魔王の復活。彼はまだ力を取り戻していないため、国から崩そうとエノン・レーヴィンに洗脳を掛け、その娘を攫った。しかし今回は俺が命からがら助け出した」

「命からがら、ねえ。平然としてるけどな」

「民からすれば分かりません。次に各地に俺とミリシアナで作った魔法生物を彷徨わせ、ある程度の危機感を持たせます。一つ一つ俺たちで討伐し、魔王城に向かいます」

「ふむ」

「あとは古の勇者の物語を辿りましょう。折角名前も被っている事ですし、手柄のひとつでもあれば、代替わりの時にも苦勞が無いでしょう。父上の名声は高すぎますし」

「自作自演じゃねーか」

苦笑する父親に、コウキはふつと笑みを零す。

「——それにミリシアナも同行します。英雄であれば、もう文句は

出ないでしょう」

「お前それが本音だろ！」

エノンの謀反（未遂）から、貴族達に娘を薦められミリシアナについて苦言を呈され、の繰り返しが腹に据えかねているらしい。

どう見ても邪悪な笑みを浮かべる息子に、ディオは苦笑を浮かべて肩を竦めた。

各地の森などに“魔物”らしきものが次々と発見され、人々は恐怖の底に叩き落された。かつての魔王城付近から空が翳り、地から瘴気が立ち昇る。

無論魔物については人を傷つけないように制御された魔法生物であり、空が翳っているのは城に設置した魔法道具で人工的に曇天を作っているからであり、瘴気に到っては色付けしたただの無害なガスである。

「聖剣を授ける」

そして今、かつて勇者を召喚したというイ・ソーマ大神殿で、法王リュエシアナ・ミミーによってコウキ皇太子に聖剣が授けられたリュエシアナはクエンティア・ミミーの弟の孫であり、女性としては初めての法王となる。腰まで伸びた銀髪が美しいアーヴ族の女性であった。

またその次に、ミリシアナ子爵令嬢に聖杖が授けられる。盛大なマッチポンプに「いいのかそれは」と青ざめていた彼女だが、魔法生物を作る時は妙に楽しげにしていた。

そんな彼女も、勇者と精霊の伝説になぞらえた少し露出の高い衣

装を纏って杖を受け取っている。精霊のいとし子とまで呼ばれた彼女だが、伝承に残るミーナ・ハルベルンとほぼ同じ容姿をしている事もあり、民衆からの期待も高い。

「私は父を陥れ、民までも傷つけようとする魔王を許す事はできません……！ たとえこの命果てようと、殿下と共に魔王を倒します！」

そんな彼女の渾身の演技に涙した者も多いという。

旅は至極順調であった。各地の魔物を薙ぎ倒し、2人という少数でありながら負け姿は1度たりとも見せず、民衆は2人の活躍に沸いた。

やがて魔王城の懐である元榮帝国地域へとたどり着き、人の目が無くなる。

「……疲れたー」

そこで魔王城に轉移し、2人は一息ついた。

あとは城に仕掛けておいた仕掛けを解き、空を晴れさせ、瘴気を消すだけ。

簡単なものである。

「そうだね」

ふあ、と欠伸をする。2人は例のベッドに倒れこみ、そのままぐっすり眠った。

翌朝、適度に怪我をしたように見せかける魔法を掛け、体を汚し

てから道具を壊す。空は晴れ渡り、陽光に魔王城が輝く。ついでに浄化されるようなエフェクトも出た。

転移で帝都の外に戻り、わざわざ門から戻った。民衆に讃えられつつ、どこかぎこちない笑顔で手を振るミリシアナと、完璧な笑顔で手を振るコウキが対照的でもあった。

「という訳なんだけどね」

「マジか。……お前も親父も大それた事するよな」

とある町の酒場で、懐かしげに語り合う黒髪の男が2人。

片方は整った顔立ちで銀色の目をしており、周りの目を集めている。

もう片方は平凡そうだが、黒髪に黒い目で肌は焼け、体つきもそこそこ逞しい。

「母親を困らせちゃいけないわよ、ミツキ」

「分かってるって。あーあ、報われないなー」

そして横で何本目かのワインを開けている女性は、薄い茶色の髪に眼鏡を掛けた美女。

——上からミツキ・ヤシロ、ミツヨシ・ウジハラ、そしてその妻カリーナである。

「ま、飲もうぜ。何回目の失恋記念だ？」

「うるっさいな！」

カリーナはある意味、ミツキが母親以外で唯一気を許す女性だ。ミツキは母親以外の女性をとことん拒絶する性質なのである。女嫌いと言ってもいい。

しかしカリーナは竹を割ったような性格で、また既婚であるし、なんだかんだで夫に対して一途である。慣れるまで時間は掛かったが、彼女には普通に接する事が出来た。

ミツヨシとカリーナがミツキに出会ったのはもうずっと昔の事である。

——ミツキが最初に両親を喪った頃の事だ。ふらふらと彷徨い続け、行き倒れた所をミツヨシとカリーナに拾われた。

「まあまあ、飲みなさいよ。飲むのが1番よ」

「自分が飲みたいだけのくせに……」

「何が悪いってのよ。ほら、あたしだけ飲むのも悪いでしょうが」

カリーナはジョッキをミツキの前にどんと置いた。ミツキは溜息を吐き、一気に呷る。

始めこそ、ミツキの父にトラウマ気味なミツヨシには怖がられたが、カリーナがこうして2人に酒を飲ませまくったり、話を聞いたりと世話を焼いてくれた。

以来、互いに寿命の無いような身であるため、友人としての付き合いがある。

両親が生まれ変わるたびに、傷心のミツキを慰めるために3人で酒を飲む。

そんな付き合いが長く続いていた。

「つーか今度は美奈の方の記憶があるんだよな。どうだった？」

「相変わらず！ もー、何で父さんから逃げないんだか……」

「女心ってのはあんたには理解できないわよ」

ぴしゃりと言い放つカリナに、男2人は肩を落とした。

黒宰相謀反未遂顛末（後書き）

何故か仲良くなった人たち

皇帝とその妃、若かりし頃（前書き）

性描写・暴力描写にご注意ください。

皇帝と皇妃の過去話。いつもの如くヤンデレです！

皇帝とその妃、若かりし頃

ディオとベラ——ベラニーラが出会ったのは、学生時代のことである。

同腹妾腹の数多い兄弟たちの中でも群を抜いて優秀であつたディオだが、その性格から問題視もされていた。

何かさせれば数秒で逃げ出し、神出鬼没で居場所も掴めない。
気さくだといえは聞こえはいいが、まともな皇族としての話し方もなっていない。

専ら仕事や勉強よりも遊びを好み、更には女性を弄んでは捨てる。かといって何でも“できない”訳ではなく、やれば何でも出来てしまう。

とにかく皇帝たりえる威厳というものが全く無い。カリスマ性はあるといえはあるのだが、それを発揮しようとする事も無い。

学校では「サボれるから」という理由で魔法科に属している。
授業は最低限しか出ず、大抵は自分の研究室で寝ているか女を連れ込むか、あるいは親友（だと勝手に認定した相手）に絡んでいるかだ。

「エーノーナー、遊ぼうぜー、暇だ暇」
「邪魔です」

エノン・レーヴィンは法学科に所属する、公爵家の次男だ。身分としても友人づきあいには問題が無く、また自分に対して媚を売らないため気に入っていた。

大抵は図書室の定位置で本とノートを広げているエノンの向かいに座り、適当にエノンの脇に積んである本を取って読んでは「使うので」と奪い取られ、紙を貰って折って芸術作品に仕上げてみたりと暇を潰す。

何をしてても、物足りない。

ずっと昔から持っている、飢餓感。それを誤魔化すように、ただ娯楽だけを飲み込んで、惰性で過ごしているかのような毎日だった。

そんなある日の事だ。

何時も通りにエノンにちょっかいをかけ、昼寝でもするかと机の上腕を組んだ時だ。

「エノン、ちょっといいか？」

澄んだ響きとは裏腹な、やや雑な口調の声が聞こえた。
くい、と顔を上げる。

そこには胡桃色の長い髪に、気の強そうな紫色の瞳の少女が立っていた。

「……何だ？」

「税金関係で聞きたいんだけど。暇じゃないならいい」

珍しいこともあるな、とディオは軽く目を見開く。

エノンは兎に角勉強ばかりしていて、男女共に知り合いが少ない容姿は悪くないし、勉強以外では意外にも融通が利くのだが、やはり勉強ばかりのイメージが先行して人が寄り付かないのだろう。

「なあ」

声を上げると、ようやく少女はディオに気づいたようだった。

紫の瞳と、ディオの赤い瞳。その視線がぴたりと合うと同時に、何か――

（……何だ？）

強く、胸を打つ何か。ぞくりと背筋に走る甘いもの。

そのときはまだ、それが何なのか分からなかった。

「俺が教えてやるよ。エノンは勉強中だしな」

そして気づいたら、そう口に出していた。

彼女――ベラニラ・アミルは商工学科に所属する、14歳。つまりディオと同じ年だ。

宿屋の娘であり、将来は家業を継ぐ予定で勉強しているそうだ。

「ふーん、あんたがああ放蕩皇子なんだ」

「そうそう……まあ面と向かって言われるのは初めてだけど。度胸

あるな」

「それくらいで怒る？ あ、そうだ。酒税つてさ」

平民でありながら、貴族の娘たちよりも遠慮がなく、媚びる様子もない。

柄は悪いが、学業に関しては真面目で努力家。あまり要領は良くないが、堅実に積み重ねている事を示すような付箋だらけのノート。

「ありがとよ。頭いいんじゃないか、何で遊んでんの？」

「何でも出来るからつまんねーの」

「そつ？ なら、また教えてくれ」

屈託の無い笑顔。

——それがあまりにも新鮮である事に気づく。

誰も、自分に対してそんな笑顔を浮かべたことは無かった。
普通なら、多かれ少なかれ打算を含んでいるものだ。

ちなみにエノンの笑顔は見たことが無い。

「いいよ」

何故か、心が躍る。偽物の笑いを浮かよとする努力は必要無く、ただ、心から微笑んでディオはそう答えた。

それからディオは、ベラニーラ……ベラに勉強を教える事が多くなった。

図書室で、自習室で、あるいはどちらかの部屋で。

ふたりきりになる事も多く、男女の関係となったのもごく自然な

流れだった。

ディオは言わずと知れた遊び人だし、ベラもまたそれなりに遊んでいる。

だから双方、いつもの事だと思っていたし、ディオは他に何人か彼女が居て、ベラも一応キープしている男は居た。

いつもの割り切れるような関係だと思っていたのだ。

けれど。

「ディオ」

図書室に行くと、エノンが迷惑そうな顔で声を掛けてきた。彼から声を掛けてくるのは珍しいな、と意外に思う。

「お前最近、他の女に会っていないだろう。こっちに文句が来るから別れるかどうにかしろ」

「……あ」

そこで初めて気づいた。

最近、他の女と全く会っていない事に。

1人の女に溺れるなど、今までにないことだ。

ベラの胡桃色の髪を撫でつけながら、首を傾げる。

「なあ」

「何だ？」

「……他の女、全部フッタって？」

「そうだけど」

「いいのか？」

いいのかと言われれば、分からない。

しかし大多数の女が居なくなっても、全く惜しいとは思わなかった。

「いいだろ、別に。どうせ最近会ってなかったし」

「ふーん……」

ベラと共に居ると、物足りないとも思わなくなった。飢餓感が充足感にとって代わる。

恐ろしいことに、キスひとつしなくても横に居るだけでそう思えてしまう。

「ディオ」

ベラは紫の瞳で見上げて、甘さというものに欠如した口調で言う。

「溺れるなよ。どうせ別れなきゃいけないんだ」

「……何で？」

「あたしは平民で、あんたが皇族だからだよ」

分かったか、という言葉に答えることは出来なかった。

中庭のベンチに座って、ぼんやりと目を閉じる。

ちらつくのはベラの笑顔と、柔らかな髪と、紫の瞳と、所々薔薇色に染まる白い肌と。

「病気か」

想像するだけで心臓が跳ねる。

とりあえずそう結論付けて顔を上げると、遠くに彼女らしき胡桃色の髪が目に入った。

あ、と呟く。

立ち上がって駆け寄ろうとした事に、違和感すら持たなかった。
——しかし。

「ベラニーラ」

茶髪の男が彼女に話しかけたのを見て、思わず足を止めた。

「何だよ。抱かせろっつーんならお断りだ」

「そういう事じゃない。あの件、考えてくれたか？」

「ごくり、と唾を飲み込む。目の奥がずきずきと痛むような感覚がする。」

手にちくりと痛みが走り、握り締めていた事に気づいた。

「卒業してから、お前の妾になれって話か？ あたしは——」

それ以上、耳に入れたくなかった。

ただ彼女に背を向けて、気づかれないように逃げ出した。

「お前、どうしたんだ」

数日後、久しぶりに見たエノンがそう言った。
何故か気の毒そうな顔をしている。

「クマが出来てるぞ」

「……そりやお前だろ」

「お互い様だ」

そういえば数日も寝ていない。

一体自分がどうしてしまったのかと思いながら、図書室の机で腕に頭を寄せ、デイオはぐつたりと伏せて眠り始めた。

夢にまでベラが出てきた。

重症だ、と目が覚めてから彼は呟いた。

商工学科が期末考査でベラにはあまり会えない。
そう言い訳をしながら、あの時彼女と話していた男について調べた。

どうやら男爵家の長男で、卒業と同時に跡を継ぐことになってい
るらしい。

「妾……か」

呟きながら、眉を顰めて床を蹴りつける。

どうしようもなく、腹が立って仕方が無かった。

数日間の期末考査が終わると、ベラが研究室に来た。

ノックの音が響くのを聞いて、ぱつと顔を上げる。

そしてドアを開けて、何故か頭からびしょ濡れになっている彼女を見て首をかしげた。

「なんか拭く物あるか」

「あるけど……どうした？」

「気にすんな」

タオルを貸し、ついでに魔法で乾かすのを手伝う。
ベラは黙り込み、ただ唇を噛み締めていた。

図書室に行くと、やはりエノンが勉強している。

その向かいに座ると、今度は少し怒ったような顔をしている。
珍しいと思う前に、その言葉に思考が停止した。

「ベラニ―ラが嫌がらせを受けていると聞いた。お前、女の始末はちゃんとしろ」

「……は？」

「水を掛けられたと——おい、室内で走るな」

気づけば駆け出していた。

ぐちゃぐちゃの思考のまま、ただ、彼女のもとに。

混乱しながらも、彼は緻密で正確な魔力操作でベラの居る場所を探当てた。

明らかに、普通なら近寄らないような校舎の裏側。
それが意味するものなど、1つしかない。

ディオは唇を噛み締め、その方向を睨みつけながら駆ける。

「ベラ！」

辿り付くと、そこには蹲っているベラが居た。はじかれたようにディオを見て、唇を噛む。

駆け寄って、その体を抱き締めようとする。

しかし——彼女は黙ってディオを押しつけようとするかのように、腕を突き出した。

「別れよう」

ディオは目を見開く。

ベラはただ、真っ直ぐにその目を見ながらも、その腕から逃れようとするかのように立ち上がる。スカートを払い、手を握り締めて

「お前には、もっと相応しい奴がいる。分かってるだろ——ディオ？」

首を傾げる彼女の前で、ディオは。

——収束する感情。そこにはもう以前のような生ぬるさもなく、

「おい……？」

彼は口元を歪めて、ただ、感情に身を任せた。

目が覚めると、ベラは両手足に嵌った枷に眉を顰めた。

囚人に使うような無骨なものではないが、ぴったりと巻きついて
いる革のリストバンドから伸びた鎖は到底切れそうにない。

体を動かそうとして、ずき、と足腰に鈍痛が走るのを感じた。

(……いや、どんだけやったんだよ、筋肉痛って)

肉体関係はもう今更だが、ディオはさして性欲が強い方でもない
らしく、暫くいちゃつけば満足できるようだったというのに。

元々ベラは女子にしては体力もある。それが筋肉痛になる程とい
えば、相当のものだ。

(何なんだ……)

遊び人のディオは、あまり人に好きだとか愛しているといった事
は言わないと有名だ。それが、記憶にある先程までの彼は。

また、痕を付けると見せびらかすような女がいるため、キスマー
クも絶対に付けなかった筈だ。ベラと付き合ってから、それは変
わらなかった筈だったのに。

視線を送ると、一糸纏わぬ肢体の所々には花びらのような赤い印
が咲き乱れ、耳にはまだ、腰に響くような囁きが残っている。愛し
ていると、何度も何度も言われた。

更に、流石に体は拭き取られて綺麗になっているようだが、記憶
にある限り避妊すらされていない気がする。

避妊の方法は主に薬で、そのあたりはしっかりしていた筈だとい
うのに。飲んでから1時間効果が続くいつもの薬を、飲んでいた様
子は無かった。

しかも昼下がりがりだった筈が、窓を見る限りもう夜中らしい。

「起きたか？」

暫く頭を悩ませていると、ドアが開いてディオが現れた。
何故か一仕事終えたような爽やかな笑顔を浮かべている。

「何のつもりだよ」

「ん？ ああ、ちゃんと薬は飲ませたから大丈夫だ。妊娠はしないさ」

「は？ ……じゃなくて、これだよ。手と足」

「そりゃ、逃げないようにだろ」

意味が分からない。

睨みつけるが、ディオは全く意に介さずに楽しげな笑みを浮かべてベッドに腰掛け、ベラの白い腹を撫でる。

「子供はまだいらないな」

「……何、言ってるんだよ！ 別れるって——」

「別れねーよ」

優しげに動いていた手が、すうつと首に伸びる。

浮かぶ笑顔とは裏腹に、混沌を湛えたような瞳に射抜かれる。

締め付ける手にゆつくりと力を入れながら、ディオは額に軽い口付けを落とした。

「な、にすんつ……だよ、お前」

「泣いても喚いても嫌がっても、別れねーし離さない」
「は……！？」

段々と苦しみ歪んでいく顔を、熱を孕んだ目で見る。

「別れるのは、俺かベラが死ぬ時だけだ。……誰にもやらない。妾になんかさせないし、ベラを苛めていいのは俺だけ」

「っ……！」

「そういう顔だつて、人には見せたくない」

手を離れたかと思うと、今度は唇を重ね合わせる。

枷のついた手と手を繋ぎ、指を絡めながら口付けを深めていく。音を立てて幾度も唇を吸い上げ、舌を絡め、零れる唾液を舐め取る。

暫くして離れると、ベラは情欲の色をちらつかせながらも気丈に睨みつけた。

「……ああ、そうだ」

ベラの体を愛しげに撫でながら、思い出したように彼は言う。

「あの男爵家の奴と、嫌がらせをした女子、明日には退学処分だよ。俺がやったんだけどな」

そして顔を引き攣らせたベラに、再び濃厚なキスを落とした。

そしてこれがただの前哨戦でしかないことを、ベラは在学中、そしてその後も思い知る事になる。

四六時中とにかく纏わり付かれ、僅かにでも他の男に笑顔を見せれば数々の“お仕置き”という名の法的にギリギリな行為ばかりされ、家のことがあるからと言えば病気で寝たきりだった弟を治療し

て問題を消し、平民だからと言えば皇子の身で駆け回って平民と貴族間の差を無くし。

そんな事もあり、平民の地位を向上させた彼は民衆の人気を得て皇帝となる。

逆に貴族の反感を買い、この国には滅多にない反乱を起こされたりもしたが――

「俺、早く帰ってベラを可愛がるんだ……っ！ 訳で行ってくる！」
「ちよっ陛下！ 待つ――陛下ああああ！」

――と前線で暴れまわって鎮圧したので、むしろ彼の名声を高める事になった。

彼の息子とエノンの娘が学校に通うようになると、古参の教師達は「陛下が帰ってきたようだ」と懐かしんだという。

皇帝とその妃、若かりし頃（後書き）

息子よりマシ（酷い）

ベタですねーベタベタですね。遊び人が本気になると怖いよ！

あとポッキー話も追加すれば全て放出した事になります。

また思い出したように更新する事もあるかもしれませんが、その時はどうぞよろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5253y/>

ヤンデレの幼馴染に死んでも愛され続けて番外編集

2011年11月27日13時47分発行